



日本経済新聞 (2015.12.1 夕刊) に

子育て・まちづくり支援プロデューサーさんの活躍の様子が取り上げられました。



地域の子育て支援で活躍するシニアが増えてきた。子育てが一段落した女性が協力するイメージがあるが、最近では男性の姿が目立つ。世代間の交流はシニア本人の生きがいになる。研修の機会があることも、一歩踏み出す後押しになっている。

11月下旬の土曜日、東京都港区の子育てひろば「あい・ぼーと」で、シニア男性による遊びの時間が始まった。絵本の読み聞かせに合わせてダイナミックに体を動かしたり、歌をうったり。30分はあっという間だ。「子どもはこの時間が大好き。ほぼ毎回通っている」。1歳の子どもを連れて母親(40)は話す。

遊びの時間を担うのはNPO法人あい・ぼーとプロジェクトが2013年に賛成を始めた「子育て・まちづくり支援プロデューサー」たちだ。「定年前後の男性」を対象に計10日間の講義と実習があり、16年1月からは第4期の養成が始まる。メンバーは読み聞かせや一時預かり、イベントの企画運営などの有償活動に参加する。3期生の野本幸雄さん

「フリーマーケットの際に商品を展示したり、経理の力を生かしたり。職業人として培ってきた知識や経験は地域にとって大きな財産。なにより、じつくと子どもと向き合う人間



力がある」と代表理事の太日向雅美恵泉女学院大学教授は話す。子育てを支援したい住民と、支援を受けた住民をつなぐ自治体の「ファミリー・サポート・センター」でも男性の姿がある。新宿区の元公務員、沢川

研修で男性も一歩

シニア、地域の子育て担う



ダイナミックな読み聞かせに子どもたちの歓声が上がると「あい・ぼーと」

菊雄さん(66)は6月から支援する側の「提供会員」になった。まだ件数は少ないが、幼稚園からの迎えなどの活動をしている。現役時代は仕事中心だったという沢川さんが、なぜ提供会員になったのか。妻がすでに会員で、自宅で子どもを預かっていたことが大きい。それだけではな

「職場で子育て中の女性から「近所の人に助けてもらった」という話を聞いてきた。「女性の活躍」にはな力になる。人口の多くを占めるシニア世代が何か自分のできることはなにかと考え積極的に参加すれば、地域の大きな力になる。

実際、一口に子育て支援といっても、求められる内容はさまざま。女性労働協会(東京・港)の全国調査によると、ファミサポでは以前は保育施設の前で後の預かりが最多だったが、14年は保育施設への送迎が最多になった。親子が集うひろばの活動や、小学生への支援などもある。

今年からは子育て支援の担い手を増やそうと、国の「子育て支援員」の制度が始まった。仕事として子育て支援に携わりたい人を想定しており、基本研修と分野ごとの専門研修がある。新たに始める入り口の一つになる。

66歳の女性は「保育士の資格はあるが、ずっと専業主婦だった。習道が得意なので、それも生かしたい」と話す。

地域の子育てに必要な背景には、子育て環境の変化がある。祖父母の助けが受けにくい核家族が増え、近所づきあいが急速に薄れているのだ。

近所のあいさつから 三愛UJリサーチ&コンサルティング(東京・港)は2014年、未就学の子どもの親を対象に、地域の中で子どもを通じた付き合いがどれくらいあるか調査した。02年と比較すると、「園の送り迎え等であいさつする人がいる」という母親が88%から57%に、「悩みを相談できる人がいる」が74%から44%に減るなど、子育て世帯が孤立しがちなことが浮き彫りになった。

「赤ちゃんの泣き声で迷惑をかけているのでは」と不安になっている母親は多い。近所の赤ちゃんと名前を覚えて「おちゃんおはよう」と挨拶する。「頑張っていますね」と親をねぎらう。そんな声かけだっって十分な子育て支援だ。NPO法人探育て・ニッポン(東京・中央)の榎田明子さんはこう指摘する。